

ふるさとルネサンス

第6号(二〇〇六年十一月)

ふるさと探索

鈴木真紀子

石岡生まれの友人たちと時々ふるさとの探索をして楽しんでいきます。一人の友人が折々に趣きのあるところを事前調査して計画を立ててくれるのです。秋晴れの十月は八郷コースで大場家住宅 佐久の大杉 板敷山大覚寺 歩風里パン工房 小野小町ゆかりの里・北向観音とまわりました。

大場家住宅では併設の観光ぶどう園の感謝祭を翌日にひかえて会場の設定などの準備中でした。ぶどうを買って下さったお客様へのお礼に感謝祭を毎年開いているのだそうです。築二〇〇年という萱葺き屋根のお宅は昔ながらの足によく馴染んだ土間の感触が温かかったです。大体一〇年に一度屋根を葺き替えるとのことですが写真で見せてもらった一〇年前の新しい屋根の美しいこと！見事です。「ぐし」の絵も太陽に松竹梅がとても鮮やかで誇らしげです。ご主人が屋根を愛しそくに眺めるまなざしのやさしいこと！とても嬉しくなりました。そして大場家のすぐそばにある佐久の大杉。樹齢1300年〜1400年といえます。天智天皇や天武天皇のころに新芽が生まれ、幸いなことにすべての災難を逃れてこうして平成の世まで生きてい

ると思うと、大杉に耳を寄せ両腕をまわして1000年以上の歴史の映像をずっと見てみたい気がしました。柵があつてその幹に触れられないのが残念でしたが、大杉が落とした種を拾って我が家の庭に植えました。1000年の記憶の遺伝子とその種にも伝わっていることを願っています。

次に向かったのは板敷山大覚寺の「裏見無しの庭」です。茨城はいつもどこに行っても人がいないのが嬉しいですが、人が訪れないせいかなり手入れが行き届いていないのが口惜しく思われます。桂離宮を模して造られたというこのすばらしい庭園がもし京都にあつたら、全く違った装いを見せてくれるような気がします。鄙びた里や名所旧跡と言われるところにいつもそれを守る人の手や心が感じられると、それだけでそこに住む人たちの日常の豊かさや郷土への誇りを感じます。以前この会報に書いた岩手の遠野ではそういう人のことを「守人」(まもりと)と言い、観光客が訪れるどの施設も元気に年老いた守人たちの笑顔と穏やかな声で迎えますから、説明文を読まなくても旅人はその土地の現在と過去を一度に味わえるわけです。歩風里(ぼぶり)というパン工房は停年後都会から八郷に移り住んだご夫婦が営んでいるか

わいらしいお店です。名前にあてた漢字がいかにも都会風ですね。家や家財も大半がご主人の手によるもので今もペランダには作り途中の枠組みなどが秋の陽をあびて完成を待っています。お話しながら石臼でひいて下さった珈琲にオレンジビターパンを戴き、おみやげにドイツパンを買ってききましたが1週間たつてもおいしく、ガーリックバターにびったりでした。沢から聞こえるせせらぎや鳥のさえずりは自然のシンフォニーです。

その後フルーツラインを通って小野越の地名が示す小野小町ゆかりの里へ行きました。霊験あらたかな北向観音さまを拝むことはできませんでしたが、小町が山越えの途中に休んだという「腰掛石」に小町気分で腰掛けると、鬱蒼とした森の気がせまってきて年老いてからの旅の大変さを感じられました。三日月形の「姿見の池」や「すずり石」などもゆかしく、しばし平安の御世に思いを馳せたのでした。日本中にいくつ小町の墓があるそうですが、真偽はともかく多くの人が小町を慕った表れのひとつなんでしょうね。その日は一人の女性が長い時間をかけて丁寧に小町ゆかりの里をお掃除していました。お当番だそうです。こんな風に入っていることやっぱり違いますね。農作物も足音で実り方が違うといいますが、亡き人も思いを寄せてくれる回数が多いとどんなに嬉しいことでしょう。

歴史と同じ空間に身をおくと書物を読んだ時には発せられない未知のセンサーが体に生ま

れ、往事がより深くより明確に感じられるような気がします。

今回は11月23日、真壁の人形浄瑠璃を見にいつてきます。茨城県に一つだけのこの人形浄瑠璃も郷土の方の情熱で平成16年に80年ぶりに立派に復活させ今日に至っています。故郷を再発見し大事に思う人が一人でもいたらそしてその思いを発信し続けたらきつと素敵な郷土になりますね！

羅漢の寺

打田昇二

石彫家の鶴見修作先生が五百羅漢を彫り続けておられる「かすみがつら市(言い難い市名だが)中志筑の長興寺」は慶長七年(一六〇二)に出羽国仙北郡本堂城廻村(でわのくにせんぼくくんほんどうじろまわりむら)から移された寺で鳳林山と号し、山形県新庄市の瑞雲院を本山としている。

領主・本堂氏の移封に伴い、これを慕って志筑に来た竜山和尚が開山したと伝えられるが、出羽で四百年近く続いていた武将の家の菩提寺だから新領地に移さざるを得なかったのである。

本堂氏は旧志筑村周辺二十五か村の領主となり陣屋を志筑城の跡に置いて城下に再建した長興寺を菩提寺としたが、藩主は藩祖の茂親から四代目までしか此処に埋葬されていない。四代目の伊親には子が無く、姉の嫁ぎ先である戸

川家から甥の小太郎を養子として迎え、主計苗親(かずえなりちか)と名乗らせた。この藩主が芝の切通し「現在の港区西久保広町」にある青龍寺に葬られてから、それが例となって藩主は死後も江戸住いとなった。

ただし明治になってからの最後の藩主・親久は江戸(芝)で病死したのに長興寺に葬られたように墓碑に記録されているが本当だろうか。

この人の母親は石岡(府中)藩主の娘であり、両親が離婚していたから母親恋しさに石岡に近い長興寺に眠ることを希望したのかも知れない。

本堂親久と、それ以前の二代藩主・榮親(ひでちか)の正室は、日向鉄肥(ひゅうがおび)五万石・伊東氏の姫である。伊東は伊豆の伊東、一般的な姓は工藤で曾我兄弟に討たれた工藤祐経の子が日向国に地頭として赴任土着してから続いた家系なのである。これには深い因縁があるので、後で述べることにする。

戸川氏は備中庭瀬(岡山市)で二万石ほどを有する大名だったが、やはり継嗣が無くて改易され支流が五千石の交代寄合として残った。交代寄合は大名ではないが領地を持ち参勤交代をする万石未満の者で身分は旗本、格は大名のような面倒な立場である。本堂氏も交代寄合に属して「表御礼衆(おもておんれいしゅう)」という江戸城内の典礼を扱う任務を持っていた。

本堂氏は禄高八千五百石、旗本八万騎(実数は三千人ほど)の中で常に五本の指に入る家格を誇り江戸城での席次も將軍の身近にあつたらしい。

主計苗親(或いは高親)の次は朝負(ゆきえ)豊親で、本堂の分家から養子に入った源内という人物のようだが、その頃に「お家騒動」が起きていたから毒殺されたかも知れない。ともかく豊親にも子が無く本来は改易させられるのだが、幕府の要職にあつた上州安中五万石の板倉佐渡守勝清が単に源氏系という理由だけで自分の四男を本堂家に押し込んだ。勿論、正式に認められたものであるが、それが大和守親房である。

板倉氏は徳川家康の故郷・三河に土着していた足利の一族であり、八幡太郎義家を祖先とする。家康に見こまれて京都所司代となり公平な裁きを行ったことで知られる板倉勝重の子孫が備中松山や上州安中などで譜代大名として藩を持ち、代々重臣として幕政を支えてきた。水戸の徳川斉昭と親交のあつた勝明(かつあきら)とか、最後の將軍・慶喜(水戸出身)を補佐した勝静(かつきよ)など名君がいる。

本堂家が存続できた最大の理由は、その家系の特殊性にあつた。水戸に居た佐竹氏が秋田へ左遷させられたために、秋田周辺に割拠していた中小豪族が立ち退きを迫られたのだが、本堂氏もその一人で鎌倉時代末期から横手盆地の中心地に根を張っていた。本来は伝統芸能「鬼剣舞(おにけんばい)」で知られた岩手県北上地方の豪族・和賀氏の支流である。

和賀氏は源頼朝の嫡男(である筈の)千鶴丸(せんつるまる)を始祖としている。北条政子と結婚する前に頼朝が伊東八重子に生ませた男の子が

千鶴丸のだが、八重子の父親・伊東祐親が平氏に憚り伊東市内を流れる松川の上流で殺害するよう家臣に命じた。

伊東祐親は曾我兄弟の祖父であり、兄弟に討たれた工藤祐経は祐親の甥で娘婿でもあった。千鶴丸の母・八重子は工藤祐経の妻・万劫御前（まんごつぜん）の妹だから頼朝と祐経は義兄弟であり共に頑固者の祐親に妻を離別させられた間柄だった。全ての原因は伊東祐親のへそ曲がりと私欲に原因しているのだが志筑藩主・本堂氏には存続の口実を与えたような人物である。頼朝も許し難きを許している。

そして話が逸れるのだが、ついでに触れておくと曾我兄弟の母親は伊東一族・狩野氏の娘であり曾我兄弟の事件が原因で没落した多気大掾義幹の妻とは姉妹だったように考えられる。

狩野氏の預かりとなった多気義幹に替って常陸大掾として石岡に来たのが水戸の馬場氏（大掾一族）だから、歴史上の因縁というのは見えないところで繋がっている。長興寺にある最後の志筑藩主・本堂親久が系統上だけとはいえ源頼朝の末裔と称し、その正室が工藤祐経の子孫・日向飢肥藩伊東氏の息女となると。八百年以上の歳月を経て千鶴丸が蘇るような錯覚を覚える。

谷底に抛り込まれそうになった千鶴丸は、山道を通りかかった修験者に助けられたとする説やら祐親の息子ながらも頼朝に忠節心を持つ祐清（曾我兄弟の父親の弟）に護られたという説があるが本堂氏の伝えるところでは、頼朝の乳母

であつた比企尼（武蔵豪族の未亡人）の計らいで斎藤兄弟に救われ甲斐源氏に預けられたという。尤も祐清の妻は比企尼の娘である。

成人した千鶴丸は名を源時義と改め、甲斐の南部三郎光行が軍馬育成の任務を帯びて奥州糠部へ行くのに同行して岩手へ行く。甲斐駒を南部駒に改良普及させる任務である。当時、現在の北上市辺りには、多分、大伴系の小豪族・和賀氏がいたのだが和賀氏に男子が無かったので源時義が養子となつて和賀忠頼と名乗った。

本堂氏は、忠頼の孫の忠朝が奥羽山脈を越えて出羽に進出し蝦夷の山城跡を拠点に勢力を伸ばし平野部の本堂に城を構えて最盛期には五万石ほどの領地を持っていた。忠朝から志筑藩祖の茂親まで十七代というのが徳川家康に申告した家系らしくて、明治維新で新政府に提出した「大名登録請願書」にも「私家の濫觴（らんしよう）は、右大将頼朝の男・式部大輔忠頼奥州和賀に封ぜられ」と書いてある。源氏伝来の鎧なども有ったようで家紋も笹竜胆と条件は揃っている。しかし今更、何か言っても仕方ないが私は疑問を持っている。

話の発端となる千鶴丸の存在に異存は無いのだが、甲斐の国で育てられたこと、南部三郎が隠すようにして東北地方へ伴っていること、自尊心の強い頼朝が自分の長男を田舎の小豪族に養子に出す筈が無いことなどを考えると納得できない。

では本堂氏の始祖・和賀忠頼は誰なのか？…家康から突然の秋田行きを命じられるまで常陸

国を支配していたのは佐竹氏であり、天正十八年に大掾氏を滅ぼしてからは石岡近辺、旧千代田町の一帯も佐竹氏が治めていた。

その佐竹氏は八幡太郎義家の弟・新羅三郎義光を始祖とする。義光の息子が佐竹と武田に分かれたのである。後の時代には武田信玄が出てくるが源頼朝が平氏打倒の兵を挙げた頃は甲斐源氏として武田・逸見・安田・南部・一条・加賀美などの一族が結束して頼朝に協力した。甲斐源氏は各地に転戦して大きな功績を上げた。それを統率していたのは武田信義の子・一条次郎忠頼である。

寿永三年（一一八四）木曾義仲が近江粟津に敗死すると猜疑心の強い頼朝は自分のライバルになりそうな有能で評判の良い武將の粛清を始める。平将門の子孫で頼朝の旗揚げに大軍を率いて参加した上総介広常が先ず消された。

罪は「神社に参拝した」ことである。広常としては「源氏の武運長久」を祈願したらしいのだが頼朝は「源氏の滅亡を祈っていた」という解釈をした。大概の場合は黙ってお祈りをするから心の内は分らない。問題の多い時期の神社参拝は控えたほうが良い」という先人の戒めである。

広常の粛清から程無く、鎌倉の嘗中で一条次郎忠頼が斬られた。罪名は分らない、というよりも罪無くして斬られたのである。強いて罪を探せば源氏一門の中で、源頼朝より忠頼のほうが評判も良く人物的にも余程、優れていたことである。

その忠頼には幼い男児があった。木曾義仲の子の義高が、頼朝の長女・大姫の婿だったのに実にアツサリと殺されたのを見た甲斐源氏が、一族を挙げて忠頼の子を匿った。初めは奥地の北巨摩地方で逸見氏が育てていたが、南部三郎の奥州赴任に事よせて連れて行った。そのように考えると、源時義が和賀忠頼と名乗った事情も理解できる。伊東祐親に殺された頼朝の子・千鶴丸は助けられなかったという説もあり、女の子だったとする説もあるようなので、私の疑問も満更ではないかと思っている。

先祖が源頼朝なのか一条忠頼なのか、どちらにしても江戸時代に血統が絶えてしまったのだから余り重要ではなくなってきたが、経緯だけは明らかにしておかねばならない。

さて和賀・本堂両氏とも南北朝の争乱から戦国時代を生き延びてきたが、豊臣秀吉が小田原城を囲んだ際に出された「出頭命令」に対して、和賀本流は仙台の伊達政宗に相談したら政宗は「行く必要は無い」と言いながら、土壇場で自分だけ小田原に滑り込みをした。つまり政宗に騙されて没落したのだが、山形の最上氏を頼っていた本堂氏は小田原へ行き二万石程度の領地を安堵された。

秀吉は二十一世紀に居た神社参拝の好きな某国の飛脚屋総理大臣のように反対した豪族たちを徹底的に潰した。石岡でも府中城に依る大塚清幹が小田原へ行かず、秀吉の名を借りた佐竹氏などに滅ぼされて石岡近辺は佐竹領になってしまった。

東北各地では大崎、葛西、稗貫、小野寺などの有力豪族が潰され、また増税に繋がる検地に反対する反乱が各地で起こった。本流である和賀氏の残党が反乱軍に加わっていたため、本堂氏は責任を問われて領地を八千石ほどに減らされた。

それでも本堂氏は加賀の前田軍に属して朝鮮出兵に備えるなど、近隣の武將たちと連携して我慢の日々を送り、徳川家康が天下を取る日を待ちわびていた。慶長三年、秀吉が死に、辛抱していた家康の時代が到来することになる。

征夷大將軍を狙う家康は自らを新田系源氏と称していたから源氏系には弱い。本堂氏は源頼朝の末裔という切り札を掲げて家康に服従を誓った。

その頃、本堂氏の当主は伊勢守忠親であったが、秀吉に従った経歴が本堂氏のマイナスになることを慮り、未だ少年だった嫡男の茂親を当主として家康のもとに出頭させたのである。秋田訛のある純朴な少年を見て家康は心を許し、初対面ながら本堂氏を家臣と見なしてくれた。

慶長七年の初夏、佐竹氏は関が原合戦に曖昧な態度をとったことを誹責されて秋田へ左遷され、その影響で仙北平野に割拠していた中小豪族たちは関東へ移された。本堂氏の仲間だった六郷氏は石岡最初の藩主となった。

本堂氏は表高八千石だが、秀吉時代以前は万石大名だったので、茂親を気に入った家康が磐城国菊多郡内上小川村ほか二万余石の領地を与えると言ってくれた。菊多郡は古代に常陸国だ

った地域である。八千から二万に上がるのだから小学生でも得なことは分るが、問題は領地の中身である。

内示された二万石は夏井川溪谷の下流域で景色が良いが山間部にある。実は本堂茂親には欲しいと思っていた領地があったのである。それが石岡近辺の筑波山が見える台地、旧志筑領だった。

大御所の家康に言つと怒られるから、江戸城にいた將軍・秀忠にこっそりと伺いを立ててみた。

幕府にすれば八千と二万との交換だから異議は無い。しかし鬼より怖い大御所・家康が決めたことを変えるのだからそう簡単にはできない。結局正式な領地朱印状が交付されるまで二十数年を要したのである。その間は言わば不法滞在のようなものだったから、領民との間にもトラブルがあり本堂氏は、言わば領民に気を使いなから治世を進めてきたものと思われる。

その融和政策の一環として実施されたのが藩主の菩提寺の近くに同一宗派の寺院を置き、領民に管理運営させることである。

長興寺から徒歩数分の宿通りにある瑞龍山雲集寺は、かつて山越えに柿岡盆地へ行く峠にあった伝行基作の十一面観世音を安置したお堂だった。後に麓に降りて真言宗の寺となり阿弥陀如来が置かれたが佐竹氏により曹洞宗に改宗、総本山永平寺ゆかりの高僧が開山したと伝えられる。

志筑藩初代藩主・本堂茂親は本国出羽から長

興寺を移して菩提寺にすると共に、雲集寺を陣屋近くに移させて地元領民たちの寺とした。

本堂氏の血統が絶えて幕府重臣の血縁が相続した志筑藩では権威主義に偏り佞姦が蔓延る。その例として新撰組から高台寺党（勤皇派）に移った伊東甲子太郎兄弟とその父親の脱藩事件がある。

歴史は悠久である。出羽本堂に興った和賀一族本堂氏の変遷を垣間見るとき、時代時代に生きて喜び笑い怒り泣いた多くの祖先の存在を知ることができるような気がする。

彫り続けられる五百羅漢像は誰に似ているのであるうか。静寂の中に槌音が今日も響く。

アオザイ

小林幸枝

「詩文の舞の衣装どうする？」

つくばカピオの公演の衣装のことで演出家に言われた。私は、咄嗟にアオザイと思いついたのだ。

ベトナムを旅行したのは三年前のことです。日本より遥かに蒸し暑い国でしたが、その蒸し暑さの中で生活の知恵として創造された料理は私の口に合い、とても美味しく嬉しいものでした。

ハロン湾に行く途中の休憩時に、偶然アオザイに刺繍の仕事をしているベトナムとラオスの饗嘩者に出会った。日本語の手話とはかなり違

ったが、普通の人の会話に比べたら、通じ合えるものが多く、直ぐに友達になった。

彼女等の案内でアオザイを見せてもらったのだが、その当時私はかなりの太り気味で、陳列してあるアオザイは着ることができなかった。オーダーメイドで時間が必要といわれ、シヨックをもって断念したのでした。

衣装どうする？ といわれたとき私は直ぐに今の体形ならあそこにあったアオザイが着られると思ったのでした。

「アオザイではだめですか？」

「アオザイね。いいね。いいけど、そうね、

今回の舞台はダメだな」

どうしてですか、と言おうと思ったら、

「今回は『ふるさとの風に吹かれて』だから、ちよい悪っぽい成人女の衣装で行こう。うん、それがいい」

何だ、私に相談するような振りして演出家はもう決めているのです。アオザイと思って、何だか損をしたみたいないな気持ちになったのでした。でもそれを言うと、演出家だから二十言ぐらいの説明を聞かされることになるから、ハイと応えるしかないのです。

でも、ふるさとの風と題した詩文なのに、ちよい悪女の衣装でいいのかな？？？

三年前のベトナムでは、ホーチミンとハノイを旅したのですが、ベトナム戦争時の痕跡と戦争証跡博物館を見学したときのシヨックは今も生々しく残っています。ゲリラ戦の狭いトンネル、落とし穴に罠、そして何よりシヨックだ

ったのがホルマリンの液体に沈んでいる枯葉剤による奇形児とソンミー大虐殺の写真。人間とは殺戮の動物とは言葉に言われているけれど、戦争は決してやってはいけないこと。弱いものだけを犠牲にするのだから。

誰もがみんな一生懸命に生きることを願っているし、一生懸命に生きているのだから、その命を絶つ権利なんて誰にも無いのだから。

二、三日前の新聞だったかテレビのニュースだったか忘れてしまいましたが、いじめ問題で自殺した学校の校長先生が、人の命は地球より思いなんて言葉を引用していましたが、わかり切った、使い古された知識だけを振り回すようなことを言うよりも、そこに倒れた人が居たら直ぐ手を貸してあげることの方がもっと大切なのに、とやっぱりベトナムの戦争証跡博物館を思い出してしまいました。

そうしたら、演出家が、ふるさとの風に吹かれての詩文だから、ちよい悪っぽい成人女の衣装で行こう、という言葉のほづがよっぽど人間的に思えたのは、何故か不思議です。

「でもやっぱり私はアオザイのような衣装が良いな…着たいな」

つくばカピオの舞台、本当にちよい悪の衣装だったら、ベトナム料理に連れて行ってもらわなくては。演出家に！

ふるさとを謳う舞に、ちよい悪の衣装を着るのはかなり勇気があるのですから。

風土記の丘で歴史案内をしていると、

「えーッ。石岡にこんな歴史があつたなんて知らなかつた」

という方にお会いすることが少なくありません

「えッ！ 九百四十年余りも続いた常陸の国の都を知らない??？」

学校での教えは無かつたのだから。でも、残念ながら、ふるさとの歴史を語ることは出来ませんでした。

ふとわが身を振り返ってみる。

行方市（旧玉造）がふるさとの私は、富士山と筑波山と霞ヶ浦に見守られ田園風景の中、のんびりと育ちました。

四キロ余りの通学路でしたから、忘れ物をして、途中から戻るとなると大変。そつと忍び足で教室に入るしかありません。

『雑草も三つ編み ランドセル背負つた道』

六年生のとき、教室は二階でした。きらきら光る湖水と富士山に見とれ先生のお叱りも受けました。

三、四年生の時だつたでしょうが。その頃の机は箱型で蓋が取れるよつになつていました。

一年間のお世話になつたお礼にと、その蓋と亀の子タワシを持って一列に並んで霞ヶ浦に出かけ、ゴシゴシと洗いました。

古代から連綿と続いた人々の暮らしの中の一人として湖水と戯れた日々が愛しく懐かしい。

その頃の社会科学の授業は、私の場合お伽話でも聞いているかのように、そして中学学校では、受験の為の諳んじるものでしかありませんでした。

事件事故のとどまることを知らない殺伐とした現代に、まず自分を知る自分史、「ご先祖さまとの家族史、そして地域の歴史を華族で語り継ぐことが、郷土をいつくしむ心、思いやりや優しさが育まれ、美しい国、日本をとりもどすことを信じます。

今年の三日間のおまつりには、民族資料館へ、北小学校の生徒さんと、その親御さんとの見学があつたことをお聞きしました。また、おまつり前に、駅前観光案内所での案内当番の折に、今年四月に赴任されたという石岡小学校の先生がお祭りについて教材にしたいといらっしゃいました。

地域の歴史を先生と生徒、そして親と子で語り合う風景を描いて心温かくなりました。

柿の子

みんな

甘えんぼ

折れそうよ

おかあさん木

娘と孫が帰つて二週間が経つた。

日中よく遊んだのに、夜中に何度も目を覚まし泣いた。あれはお腹がすいたからなのか？環境がかわつて不安だつたのか？ そのたび娘は、横になつたまま乳をくわえさせたり、起き上がつて飲ませていた。

夜中だから眠いだらうに。それでもやさしい声で、「ピヨンスー、いい子ね」と撫でたり、「いっぱい飲んでねんねしてね」と頬擦りしていた。母親になつたのだ、と娘を見直した。その後孫は朝まで熟睡した。

朝は六時になると泣き出す。この時の泣き声は、おっぱいではないらしい。起きることの催促のようだった。

回りをキョロキョロしながら、私と目が合うと体乗りだしてくる。喜びの声だ。「あー、あー」と叫ぶ。

私の腕の中から次は爺ちゃんのところへ移つて行く。その後はしばらく男同士で遊んでいるようだ。何をしているのかなと思ひながら、朝食の支度を急ぐ。

一時間ほど経つと爺ちゃんと孫は降りてくる。

「よく遊んだよ」

「カレーが出たよ」

「爺ちゃんくたびれたよ」

普段は見ることのできない笑みを浮かべて、娘に孫を渡す。何でもないけど、幸せな朝のひと時を何日か繰り返された。

爺さんと、婆さんになつた私達にも子供達を育てた遠い日があつたことを思い出す。

娘達が帰り、二人の日常生活にもどす緩衝地帯を作るかのように、春の雪が積もつた。

春の淡雪というが、今日の陽射しに雪の白は土に染み、替わり水仙の蕾が膨らんだ。ようやく布団をかたづけたら、春が部屋の中をゆっくり流れていった。

日常が戻ってくるかとまた変化を求めめるのか、「どうしているかな?」

「覚えてくれているかな?」
などと思ひながら次の日への希望を見ている。

枝葉ののびて木陰の作れ

白井啓治

市岡市中町に、ふるさとルネサンスが立ち上がり、ふるさとルネサンス塾の指導を引き受けて二年半が過ぎた。大勢でなくともいい、確りとした歩みの出来る「ふるさと市民プロ」が育てば、夫々が枝葉を伸ばし、一里塚に植えられた榎の巨木のようになつて、木陰をつくり行き交う人々がちよつと一息できる場所を作つてくれるだろうと思つてきた。

第一期の卒業生を送り出し、文章と絵と舞台表現という枝の小さな芽がうまれた。小さな枝の芽は順調に育ち、日常にある風景を色に刷きそこに小さな発見の一行の眩きを添える「絵と一文文教室」では笑いがたえない。ふるさと

物語を舞台表現する「表現舎しゅわーど」は十一月二十六日(日曜日)つくばのカピオ・ホールで初めての公演を打つことになった。またふるさと同人誌の足がかりになればと、この「ふるさとルネサンス」の会報を六月から出し始めこれが第六号になる。この会報を足がかりにして何とかふるさとを謳い物語る同人誌へと発展していつてもらうことを願うばかりである。

ふるさとルネサンスの第一期として、まずは三年間の約束で指導を始めたのであつたが、人数こそ少ないが、何処にも真似のできない、優れた「ふるさと市民プロ」が誕生したと思つている。

文章と絵と舞台表現という三つの枝は確実に天に向つて大きく背を伸ばしている。三つの主枝からは、更に色々な枝を芽吹き伸ばしていくだろうと思つし、そうなつてくれることを願つている。そうなつてくれなければ、折角ビジネスモデルとしての「ふるさとルネサンス」の指導を引き受ける意味も、指導する楽しみもない。

そんな私の思いの伝わつてか、会報が作られる頃から、龔俳優の小林幸枝さんから朗読サイン舞劇だけのグループを作つてみたいという話が出て、先月十月に小林さんを座長とする「ことば座」が立ち上がり、石岡市柴間にあるギタ―文化館を発信基地として「常世の国の恋物語百」への挑戦が、来年の二月からスタートすることになった。

ふるさとルネサンスという一里塚の目印として植樹された榎が、今一生懸命枝葉を伸ばし大

木になるうとしていいる。私の個人的な感情からすると、文作屋を軸に自分の暮らしをつくつてきたのだから、まずは「ふるさと物語」の同人誌が先であつて欲しい思いもあつたが、何が後先であつてもかまわないと考へている。

打田さんの言を借りるわけではないが、歴史の里と自称しなら、石岡に文芸同人誌の一つしかないというのも不思議なことである。(私が知らないだけなのかも知れないが)

先日、石岡に唯一私の知る「ゆずりは」という同人誌をはじめられた田崎さんがお亡くなりになられた。打田さんを介して何度かお逢いしたが、残念な方を失つたと思う。

表に向つては歴史の里というのであれば、歴史を軸にした同人誌があつてもよいとおもつのだが、それを口にする時、昔はやつていたのだがと言われる。私は、昔は…と答えられるのが大嫌いな一人である。特に、昔はよかつたと言う人は大嫌いである。そういう人に限つて自分の責任を問おうとしない。

今が嫌な、住みにくい時代だと言つのは、自分がこんな時代にしてきたことを省みようとしてない人だからだ。良かつた昔は、自分の親、そして祖父母が創つてくれたものでしかないのだから。

そういう私自身、困つた現状をつくつてきた一人ではあるわけだから、その責任を果たす意味でも、明日は夢のある素晴らしい時代だよ、とせめて声だけは大きく言いたい。

「表現舎しゅわーど」つくばカピオホール公演

11月26日(日曜日)

朗読舞劇『石岡物語』

小林幸枝のサイン(手話)を基軸にした舞演技が
幻想的な『ふるさと物語』の世界へと誘います

生まれながらに音を知らなかった聾俳優小林幸枝が
心に物語の声を聞き、森田流笛方堀井洋子の奏でる
風の声に舞い、演技します。

石岡に生まれた新しい舞台表現「朗読舞/朗読舞劇」
初の舞台公演です。

脚本：近藤治平 演出：白井啓治

出演：小林幸枝 山重幸 鈴木真紀子
しらぬひろご

笛方：堀井洋子

石岡・ふるさとルネサンス劇団「表現舎しゅわーど」

2006年11月26日(日)14:00開演

場所：つくばカピオホール 料金：2,000円(税込)

チケットは、カフェ・キーボー、チケットぴあ、つくばカピオで販売しています。

今月のふるさとルネサンスの予定

絵と一行文教室(講師・兼平智恵子)

十一月十日(金)・十一月十七日(金)

午後一時半～午後三時まで。

日々の暮らしの中に小さいけれど心を喜ばせてくれた出来事、発見を自由律に一行の文に紡ぎ、色に染めて自分を褒める。

時には、思う人に褒めた自分を葉書に刷いてお裾分けする。暖かく楽しい教室です。見学、教室体験大歓迎です。

劇団「表現舎しゅわーど」

十一月二十六日(日曜日)

つくばカピオ・ホールにて初の舞台公演を行います。お祭り以外の石岡自慢を声を高らかに謳い舞います。

編集後記

チケットは、カフェ・キーボー、チケットぴあ、つくばカピオで販売しております。
演目は「石岡物語」 石岡府中城・新鈴が池物語 ふるさとの風に吹かれて 古里は春の夢」です。
入場料は、税込み二〇〇〇円。
多くの方の応援来場をお待ちしています。

第六号になりましたが、号を重ねることに読者の方が増え、励ましの声を頂き、キブアツプは許されないことと、全員気を引き締めております。
色々なご意見を四〇〇字程度にお寄せいただきましたら、紹介させていただきたいと思っております。殺伐とするニュースばかりが氾濫しておりますが、心温まるお話しなどお聞かせいただけたら、小さな紙面ですが、ホッと落ち着けるかな、と思っております。

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)